

氏 名	や お しょうへい 八尾 祥平
学 位 の 種 類	博士（社会学博士）
学 位 記 番 号	人博 第 145 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 6 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題名	琉球華僑・華人の社会学的研究
論文審査委員	主査 教 授 丹野 清人 委員 教 授 玉野 和志 委員 教 授 和田 清美

## 【論文の内容の要旨】

### I. 目次

#### 序章……………1

- I 研究の目的、背景……………1
- II 先行研究の概観と問題意識……………5
- III 方法論……………14
- IV 用語の定義……………15
- V 論文の構成……………16

#### 第1章 中華民国にとっての「琉球」

－国府および中国国民党による対「琉球」工作とその意義について－……………23

##### はじめに……………23

- I 中華民国の戦後国際秩序構想と「琉球問題」の起源：1943-1945……………25
- II 中華民国の情勢変化と「琉球問題」の変容：1945-1957……………31
- III 琉球における「国民外交」の展開とその限界：1958-1972……………40

##### 結びに……………44

#### 第2章 戦後における台湾から「琉球」への技術導入事業について……………50

##### はじめに……………50

- I 中琉文化経済協会の創設と技術導入事業の開始まで……………51
- II 台湾との技術導入事業の確立過程……………53
- III 技術導入事業の展開……………55
- IV すれちがうまなざし……………60
- V 沖縄返還と日華断交から派遣事業の停止へ……………62

##### 結びに……………64

### 第3章 1950年代から1970年代にかけての琉球華僑組織の設立過程

—国府からの影響を中心に—……73

はじめに……73

I 1950年代：琉球華僑八重山総会の設立過程……74

II 1960年代：台湾同郷会の設立過程……79

III 1970年代：琉球華僑総会の設立と復帰・断交の影響……84

結びに……87

### 第4章 沖縄施政権返還と日華断交が琉球華僑にもたらしたもの

—国籍選択と観光業への集約を中心に—……96

はじめに……96

I 琉球華僑にみられる社会的な分断……98

II 沖縄施政権返還後の沖縄社会と琉球華僑……108

結びに……114

### 第5章 沖縄中華街構想の挫折から顕彰の時代へ —「中琉」関係と沖縄における琉球華僑の

位置づけの変化を中心に—……118

はじめに……118

I 1990年代—「中琉」関係の停滞と沖縄中華街構想の挫折……122

II 2000年代以降—「中琉」関係の再開・再編と琉球華僑への顕彰……127

結びに……134

### 第6章 沖縄における多民族関係の形成過程—琉球華僑総会龍獅団を事例に—……139

はじめに……139

I 調査地概況……141

II 龍獅団の多民族化進行過程……143

結びに—多民族間結合の媒介としての龍獅団の意義……153

### 終章 琉球華僑・華人の社会学的考察……156

#### 補章1 戦後における琉球華僑をめぐる記憶と忘却—「石垣市唐人墓建立事業」を事例

に……164

はじめに……164

I 「正史」としての「石垣市唐人墓建立事業」……165

II 琉球華僑にとっての「石垣市唐人墓建立事業」……169

結びに……171

#### 補章2 米国施政権下の沖縄ロケ映画にみる「三角関係」—『海流』『琉球之戀』『夕陽紅』

を中心に ……175

はじめに……175

I 琉球独立を求める台湾からのまなざし……176

II 映画を通じた沖縄をめぐる中華民国と日本の三角関係……179

結びに……181

参考文献リスト……184

## II. 概要

本論文の目的は、沖縄で暮らす中華民国・台湾系住民（以下、琉球華僑と表記する）を対象に、彼らの生活実態を沖縄の地域社会や沖縄・台湾をとりまく国際環境との関わりから社会的に分析し、琉球華僑にとっての沖縄社会の姿や「大国」とは異なるアジアとの関わりから沖縄社会の地域性を析出することである。

沖縄社会を対象とするこれまでの社会学における研究は、大きくわけて二つの潮流にまとめられる。第一に、沖縄を主に日本本土と対比させて、沖縄社会の地域の固有性や歴史性を検証する研究がある。第二に、沖縄社会のマジョリティである沖縄人（ウチナーンチュ）を主たる対象とした研究も行われてきた。

前者については、たとえば、沖縄における近代化・都市化は農村共同体から引き継がれた血縁・地縁といった社会的紐帯と結びつきながら進展したことを明かした研究〔石原1986；鈴木1986〕が挙げられる。その一方で、後者については、沖縄と日本本土を行き来する沖縄人を対象とする研究〔谷1989；岸 2013〕や沖縄から日本を越え、出移民した人びとについての研究〔鳥越 1988〕などがこれまでにまとめられてきた。これらの研究は、日本本土とは重なり合いつつも異なる沖縄の独自性・主体性を浮かび上がらせた点に意義があるものの、戦前、日本の植民地であった地域と沖縄との結びつきについては、重要な課題であるにも関わらず、十分には主題化されていない。

もちろん、沖縄と日本の旧植民地との結びつきを対象とする研究は皆無ではなく、むしろ、近年、その研究の蓄積は増している。とりわけ、本論文の主たる対象となる台湾との関係については戦前の台湾における沖縄人〔又吉 1990〕や台湾から石垣島へ渡った台湾人〔小熊 1989；野入 2008〕を対象とした研究がこれまでにこなされてきた。ただし、これらの研究は、たしかに沖縄と旧植民地・台湾との関係から沖縄社会のあり方を再検証した点では評価されるものの、沖縄人や沖縄社会を中心に分析をすすめられており、台湾からみた沖縄の位置づけや台湾人（あるいは琉球華僑）にとっての沖縄社会とはどのようなものとして経験され、また、台湾からみた沖縄社会の位置づけなどについては十分には掘り下げられていない。

こうした先行研究の成果を踏まえ、本論文では、（1）日本本土との対比ではなく、台湾との関係から沖縄社会に固有の地域性や歴史性を析出し、（2）沖縄社会のマジョリティである沖縄人を中心とするのではなく、できる限りエスニック・マイノリティである琉球華僑の視点で沖縄と台湾をめぐる目まぐるしい社会変動を描きなおすことを主たる課題とした。このため、本論文は沖縄の史資料だけでなく、既存研究では用いられてこなかった台湾側の史資料の分析や琉球華僑をはじめとする関係者への聞き取り調査を実施し、これまで地域と地域の境界に埋もれてきたさまざまな事実の掘り起こしを進めた。

本論文は、本論として8章、補論として2章の全10章から構成される。各章の概要は以下の通りである。

まず、日本の敗戦後から1972年の沖縄施政権返還および日華断交前後の時期までの沖縄・台湾関係と琉球華僑の動向を明らかにした。米国の占領下にある沖縄と国共内戦にやぶれ中華民国政府が撤退してきた台湾との間では政財界を中心とした人士のつながりが新たに出来上がった過程を明らかにし（第1章）、こうした人士の結びつきが台湾から沖縄への労働者の送り込み事業が実施された過程や（第2章）、さらに、琉球華僑が各地から沖縄へと流入し、琉球華僑総会が設立されるまでの経緯を明らかにした（第3章）。以上から明かになったことは、当時の中華民国政府は、同じ「自由陣営」であるはずの日本への沖縄返還を認めないという立場をとり、多様な方策を講じていたという沖縄・台湾関係における政治の比重の高さである。こうしたマクロな状況が前提となり、沖縄人を中心とした既存研究ではみえてこなかった、戦前の台湾とのつながりを越える中華民国の海外ネットワークが沖縄をとりまき、琉球華僑が多様な経路を経て沖縄へと流入していた実態の一端を明らかにすることができた。

続いて、沖縄返還や日華断交を経た後の沖縄社会や沖縄・台湾関係の変化をできる限り琉球華僑の視点から捉え直した。日華断交後の国籍選択をめぐり琉球華僑は日本華僑とは異なる分断を歴史的に経験し、さらに、沖縄返還後の沖縄社会の経済構造の転換は華僑社会の秩序構造をも変化させたことを析出した（第4章）。また、1990年の中華街建設計画の失敗と2000年代以降の琉球華僑への顕彰という沖縄社会における琉球華僑の社会的地位の変化とその社会的背景、さらには琉球華僑社会における階層格差による問題を明らかにした（第5章）。そして、琉球華僑による伝統文化の継承活動が沖縄のマジョリティだけでなく、他のマイノリティをも巻き込んだものとなっていった過程とその社会的メカニズムを検証した（第6章）。ここで得られた結果から、グローバル化の時代においても沖縄・台湾関係はかつての国民党と自民党の結びつきが未だに力を持つという日本本土とは異なる独自の関係性や、沖縄社会の「本土化」は琉球華僑社会の構造転換をもたらしたものの、沖縄社会の大きな経済格差の問題は琉球華僑社会のあり方にも大きな影を落としていることが析出された。

上記の本論に加え、琉球華僑をとりまく社会的現象の多様性・多面性を取り上げるために、かつて石垣島で客死した苦力の慰霊事業を琉球華僑たちが担うようになった過程の検証（補論1）や、これまでの沖縄映画研究や台湾映画研究では十分に拾い上げられずにいた「琉球華僑映画」のフィルムの発掘をはじめ、これらの作品が製作された歴史的過程やその物語分析（補論2）といった文化的事業についての分析を行った。

本論文で描いた、沖縄・台湾関係や琉球華僑を通じた社会学的研究によって、（1）沖縄という地域や沖縄人といったマジョリティを中心とする視点や、米国や日本といった「大国」との関係からは見えてこなかった、東アジア・東南アジアのなかの沖縄という新しい沖縄社会像が見いだされ、沖縄をめぐる社会学的研究そのものを新たに展開させるだけで

なく、（２）台湾の民主化による「日華関係から日台関係へ」と呼ばれる日本・台湾関係〔川島・松田など 2009〕とは異なる、沖縄・台湾関係の独自性が析出されたことで、台湾研究の通説の見直しを促すことにもつながるなど、社会学だけに留まらない他分野にもおよぶ学術上の貢献にも結びついている。

本論文は、琉球華僑を通じて沖縄・台湾関係のなかの沖縄社会のあり方を再検証することで、沖縄社会を従来の「大国」との関係といった枠組みや、地域社会のマジョリティを中心とする視点とは異なる、沖縄を他のアジア地域社会との結びつきや沖縄社会のマイノリティの視点から考察することの重要性を示唆することができた。